

◇谷川連峰縦走の思い出

今から 55 年前、我々が青春真っ盛りの頃、秋の行楽シーズンともなれば心穏やかでいられず、土日連休に谷川岳や尾瀬、北アルプス方面(上高地など)に出掛ける話題で盛り上がった。そこで、仲間を募り谷川岳夜行日帰りハイキングに行こうと纏まるも、女性達も誘おうと思案していたら、俺に任せておくと M さんの一言で一挙に解決した。

昭和 40 年(1965 年)10 月 1 日、花(華)の金曜日、私と(工具係専用機 G)プレス係の H 氏、生技係の M 氏他、女性 3 人の合計 6 人で夜行日帰りの谷川岳登山に出掛けることになった。

出発当日の夕刻、伊勢崎行きの東武電車の中では越後中里の「清津峡」や「北アルプス(上高地)」方面に出かける同僚達が多数乗り合わせた。

国鉄伊勢崎駅で両毛線に乗り換え、新前橋駅にて 0 時 50 分発、秋田行きの電車に乗車する。午前 2 時 50 分谷川土合駅に到着した。

電車を降りると冷気が身に滲みて、体が強張ってくるのがわかった。駅のホームでは、同じ職場(工具係)の I 氏や試作係の K 氏ら山岳部のパーティーに出会った。そこで土合の避難小屋まで一緒に行動することになった。

漆黒の天空を仰げば、星が降るほど輝いて快晴の登山日和になること間違いない。途中の非難小屋に到着後朝食を済ませ、山岳部のパーティーと別れる。私達一行 6 人は谷川岳山頂を目指してガンゴウ新道を登る。真っ暗闇の中、登山道に不案内な私たちのパーティーは一時登山道を間違えてマチガ沢方面の登山道に入っていたが、幸い気付くのが早くガンゴウ新道に戻ることができ、ホッと一息。

この頃より少しずつ空が白みかけてきた。すると、先頭に行く女性達から木々の紅葉の素晴らしさに歓声が上がった。空は青く澄み渡り、全山紅葉真っ盛りである。松の緑と紅葉がマッチしてパッチワークのような景観である。こんな見事な風景に癒され

大槻伸次



ながら登山していたらあっという間に谷川岳山頂到着である。山頂に着いたのは午前8時だった。皆、元気に登頂できて皆で万歳三唱。天気が良いので赤城山、榛名山、妙義山、尾瀬至仏山、尾瀬燧岳、富士山、浅間山など一望でき眼中に収まった。山頂での休憩後、今度は M 氏一行（M 氏と女性 3 人）と別れ、私と H 氏は県境を超えて新潟県の土樽駅までのコースを辿る事になり一の倉岳から蓬峠を目指して歩いた。

谷川岳山頂までのコースは、銀座通りを歩いているようだったが、流石ここ迄来る登山者は誰 1 人として会うことはなかった。あまりの静寂に、空中に引き込まれていくような錯覚さえ覚えた。

また、相方と会話しても防音室の中にいるようで、声が吸い取られてしまう感じがした。

周辺は一面濃い緑の熊笹で覆われ、緑の絨毯を敷いたようだった。こんな中をしばらく歩くと蓬峠避難小屋の「蓬ヒュッテ」に到着した。

小屋の鐘の前で記念写真をお互いに撮りあい静かな佇まいの蓬峠の雰囲気に浸る。時計は午後 2 時 30 分を指していた。ここから新潟県側の土樽まで下りだけであるが、足のほうが大分疲れてきた。

標高が下がるにしたがって木々が大きくなってるのがわかった。紅葉の木々を眺めながら溪流沿いの S 字路をいくつもいくつも数え切れないほど下った。余りの多さに迷路のなかをぐるぐる回っているような感じですごく不安になった。

下山中、山葡萄と思われる蔓には実がたわわに実り熟れていたもので、恐る恐る食べてみたらすごく甘くて、疲れを癒やしてくれる美味しさだった。ところが、秋の山の夕暮れは早く、いつのまにか陽は西に傾き薄暗くなってきた。H 氏も疲れたのだろうか、お互いの会話も途切れがちになった。

苦難の末ようやく上越線の土樽駅に着いたのは午後 4 時 30 分を回っていた。道路から土樽駅のホームまでは階段になっているが、この僅かな階段でも辛く這いつくばって上がった。駅に着いたとき思わずは 2 人で万歳し、喜びと感激に浸った。

■1 ページ写真上・蓬峠、蓬ヒュッテにて。

■1 ページ写真中・谷川岳登山中のスナップ。

■1 ページ写真下・谷川岳山頂にて皆で記念撮影。

■2 ページ写真上・谷川岳山頂にて

■2 ページ写真下・谷川岳から蓬峠へ向かう山中でのスナップ

(2020/10/20 記・当時の日記帖をもとに編集)

